[書評]

岩下明裕編著
『ボーダーツーリズム：観光で地域をつくる』*

竹 内 雅 俊

本書の目次

序章　　誕生秘話
第１章　福岡・対馬と釜山をつなぐ
第２章　サハリン・稚内からオホーツクを結ぶ
第３章　沖縄・八重山と台湾への挑戦
第４章　小笠原断章：国境を想像する
第５章　ボーダーツーリズムが問いかけるもの
座談会　旅づくりの舞台裏
あとがき

はじめに

本書のはしがきでも述べられているように、一般に「国境が好きだ、などと言うと怪しいオタクか、軍事専門家、ひどい場合にはどこぞのスパイではないかと思われる。ボーダー（境界）という言葉もまたどっちつかずの揺らぎやグレーなものを表現するものと受け止められがちで、いずれにせよ、あまり肯定的な文脈で積極的に位置付けられることは多くはないだろう」(i頁)。こうしたネガティブなイメージの構築には、評者の専門である国際法学を含むアカデミアも多分に寄与しているといわざるをえない。国際法において「国境」とは、包括性･排他性･立体性を主たる性質とする国家領域の境であり、「争うもの」、「画定するもの」としてとらえてしまう。それは、国際法が国家間紛争を中心に構築されているからであり、日常の場における「透過性」や「共存」、「相互依存性」などについては考察の対象外とすることが大半であるからだろう。また係争水域などにおける共同開発などの事例は存在するものの、その成功事例は極端に少ないとされる。これらは、紛争状態を念頭においている学問やメディアの言説が現実の国境を社会(誤)構築(social mis-construction)してしまった例であるとすらいえる[(1)]。本書のテーマであるボーダーツーリズムは、こう

＊岩下明裕編著『ボーダーツーリズム：観光で地域をつくる』北海道大学出版会、2017年。

(1) 社会誤構築概念については、Richard Hamilton, *The Social Misconstruction of Reality: Validity and Verification in*

DOI : 10.14943/jbr.8.157

したイメージを覆す潜在性を有している。

近年、ボーダーツーリズムは『現代用語の基礎知識2016』に記載され、種々のメディアなどで取り上げられるなど、周知されるようになってきた取り組みであるが、少なくとも我が国における学問的な意味づけは未だ途上であるといえる。その原因としては、ボーダーツーリズムという企図の「対話相手」が単一的ではないことも考えられる。ボーダースタディーズ自体が地理学、観光学、社会学、国際法学などの要素を取り込んでいるという意味で学際性が強いこともあるが、ここでの問題は学界の傾向として「学際的(interdisciplinary)」という用語が往々にして、「○○学と○○学」という異なる学術分野の「対話」を通じて知見を深めるという意味でつかわれることに起因する。本書のように学問の対話相手が諸々の団体からなる「現場」も含まれることは稀であろう。本書は、このような「対話」の過程や成果を明らかにし、陸地の国境を有さない日本独自のプロジェクトとしてのボーダーツーリズムを見事に提示していると評することができる。

本稿では、まず次節において本書の構成・内容を素描した後に、学際的なプロジェクトの実践としてのボーダーツーリズムについて若干の考察を加える。

本書の構成および内容

本書は基本的に次の四部により構成されると考えられる。すなわち、①このプロジェクトの発端を記した序章、② 2013年から2016年までに企画されたツアーを時系列に並べた第１章(福岡・対馬－釜山)、第２章(稚内－サハリン)、第３章(沖縄・八重山－台湾)、第４章(小笠原諸島)までの各事例、③理論へのフィードバックを論じた第５章、そして④ボーダーツーリズムというプロジェクトを可能にした主要人物による座談会、という四部である。このほかに適宜、ツアー参加者、旅行社、自治体など企画側のコメントもコラムとして挿入されている。また、本書の特徴としてアカデミアばかりでなく、シンクタンク、NPO、写真家など幅広い執筆陣がある。こうした構成は、序章において述べられているようにボーダーツーリズムというプロジェクトの誕生経緯からするならば不思議なことではない。ボーダーツーリズムが成立背景には、境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)およびNPO法人国境地域研究センター(JCBS)というプラットフォームを中心として、笹川平和財団、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、与那国や対馬、根室、稚内などボーダーを抱える地方自治体とそのカウンターパート、旅行会社、メディア、そして実際にツアーに参加する一般市民から成り立つネットワークが大きく寄与している。そして、このネットワークの各アクターの異なる問題意識が描き出されていることも本書の特徴の一つであると考える。例えば、学術的なフィールドワークとは異なり、「ツアー」であるからには採算がとれなくてはならない。こうした点は、ボーダーツーリズムを「スタディッ

the Scholarly Community (New Haven: Yale Univ. Press, 1996)を参照。

アー」もしくは「マスツアー」のどちらに重点を置くのかという論点につながってくる。また、地方自治体としては、当然のように地域振興や島嶼政策と結びつけることが必然となる。

次に各章の内容を具体的にみていきたい。第１章(花松泰倫論文)では、韓国からの観光客の多い対馬において日本人観光客を念頭においた体験型の商品を開発するという観点から対馬・釜山のモニターツアーが実施された。その成功を受け、北海道において四つのツアーが企画された。第２章(高田喜博論文)では、この稚内－サハリンのボーダーを「資源」とし、その魅力を活用することで「観光による地域の活性化」や「観光を契機とする経済交流の促進」に重点が置かれる。こうしたことはボーダーを「砦」ではなく、「交流拠点」としてとらえることからも明らかである。第３章(島田龍論文)では、先行する事例との比較およびプロジェクト・マネジメント的な観点から沖縄・八重山－台湾のボーダーツアーを論じている。実際にツアーを企画する場合に、日程、価格設定、コンテンツ内容、情報発信の方法そして「巻き込む」べきパートナーなどで難儀する事態は、他の章でも見受けられる。この点から第３章は示唆的であろう。第４章(岩下明裕、古川浩司、山上博信、花松、斎藤マサヨシ分担執筆)では、国境を越えない「国境の旅」の事例として小笠原ツアーを取り上げる。小笠原は、境界地域として帰属やボーダーの所在も変遷してきた。その意味で、陸地にボーダーを持たない日本にとっては境界を感じることができる同島のケースは示唆的である。また、旅の記録としては臨場感が満載であり、楽しんで読むことができた。参加者達の感想やコメントが臨場感を高める効果をもたらしている。

おわりに：若干の考察

最後に、本書の学術的な意義について第５章の議論を手がかりに二点ほど提示したい。まずは、ボーダースタディーズとボーダーツーリズムの関係性である。前述されたように、ボーダーの持つ「暗い」あるいは「危険」というイメージの転換を図るという部分では一致するものの、ボーダーツーリズムにかかわる諸団体の思惑や問題意識に必ずしも一致はみられない。第５章において古川浩司は、ボーダースタディーズへのフィードバックや「これまでの日本におけるボーダーツーリズムの実践に基づく理論化」(173頁)を研究の課題として挙げている。確かに、境界・ボーダーを基軸として構成された学際プロジェクトとしてのボーダースタディーズのなかでボーダーツーリズムの果たす役割や位置づけは関心が集まるところであろう。例えば、評者の領域において「国際法と国際関係論」の学際的企図においては、成果として法化現象(legalization)や断片化(fragmentation)などの分析概念を創出した。同じように「学際性」、「実践性」によって特徴づけられる平和学は、新たな分析枠組みとして構造的暴力を提示し、体験を通じて問題意識を醸成するツアーの手法として「エクスポージャー (exposure visits)」を採用した。では、ボーダースタディーズの場合は

どうか。その目的が極めて規範的な平和学とは異なり、ボーダースタディーズにおいてボーダーツーリズムが果たす役割は未だ発展途上ではないかと思われる。しかし、さらにツアーが重ねられ、参加者が増えるにつれて参加者への教育的効果とともに、学術的な対話のみでは抽出できない問題意識や視座をフィードバックする可能性があるのではないか。

次に、日本の概念としてのボーダーツーリズムの可能性である。第５章では、海外における定義を踏まえたうえで、日本におけるボーダーツーリズムを「CIQ機関並びに対岸国との航路がある地域におけるビジネスと家事･帰省を加えた全ての目的を含めた旅行」(165頁)としている。こうした背景には、陸地の国境を念頭に構築されたボーダーツーリズムを海洋国家である日本にどのように移入し、独自の発展をさせるのかという関心がある。その方向性を評者は想像することもできないが、道東や小笠原ボーダーツーリズムのような「国境を越えないボーダーツーリズム」は、国境にとらわれず、他の地域や自治体にボーダーツーリズムの可能性を開くものではないか。例えば、ボーダーツーリズム推進協議会のウェブサイトにおいて隠岐の島を「動植物のボーダー」とし、五島市を中国・韓国とのつながりを示唆しつつも、「潜伏キリシタン」を強調する点は、こうした発想の延長にあると考えられる。プロジェクトの今後の展開や出版が楽しみでならない。